

22

花供養

文化九年

底本

糸井本

校異

石川歴史博物

花供養

(題簽・表紙)

(表紙見返し)

ことしも南無庵に数百の  
花の集りけるを、おのれに  
奉行してこの花を像前に  
たてまつり、のち梓にのぼせ  
よ、と庵主の申されけるが、  
八重にひとへにめで度、花の  
さはなる色香にめで々、  
先供養の場に時うつし  
たれば、のち梓にのぼす事

のおくれつるも奉行芙九が  
罪にぞありける。

文化壬申六月

序一ウ

唯暮る日はなし花のひがし山

ぼけやつゝじの中の畑打

ゑぼし貝春のものとて売に来て

料理の屑を鶏に遣る

朝虹の雨の盈るゝむかふがは

二人出て呼ぶ月の約束

赤いとて掃残したるそばの茎

わたり仕舞て雁のすくなき

なまぬるの外は飲さぬ貝津舟

蕪巾

蒼虬

芙九

田美

月峰

桂阿

雪雄

岱李

真菅

まづ機嫌よき爺が起／＼

裸木に伝ふ煙の雪ちかく

御供のいはなを汁に打こむ

むこえらむうちに垣根も荒て行

尻目にみたる五月雨の月

さるとりの花の身に付佐屋廻り

白いを寺の念仰聞ゆる

暮る迄外に捨たる雑水桶

ひといき東風のはるさゞ波

春漣

嵩平

漢水

茂斎

烏頂

甘谷

翠箒

月叟

十壺

雉子追の後をみせる小松原

供養済たる鐘に梅ちる

ゆのたぎる音さへ古き四疊半

またも虫歯の動き出しけり

赤蟹の遊ぶほど成みなと川

宮の鴉のもの食に来る

すゞ風のをりてそこの咄声

熊川土のわろき香のする

通ひ路に綾の袋を手をさげて

真彦

石鹿

玉屑

其成

芝山

可良久

白糸

素童

国雄

おもひ過せば低き穂薄

釣瓶にもちら／＼うつるなりほあか

月みしまへは主なきいほ

宇治人に知己に成雨降て

漢店ものにぐいと直が出る

押売に朝／＼魚を置て行

あまがむかひを無理に返さす

鶴ひとつをりて冬野を広げけり

葉のてりたらぬ市の寒菊

三千竹

希雪

一熊

百丸

とくが

百池

月孤

東陽

梅價

未年一順

山ひとつ暮兼てある桜かな

みつよつ雁の春残す声

かげろふの御畑を廻る鍮さげて

窓のあとほど壁はほせけり

新浜に藍荷の便ひけらかし

ものゝさはりて桔梗開きぬ

ゆる／＼と月も出たる草まくら

境の公事に鹿もこえぬか

怨風

蒼虬

布雪

真菅

蛾月

月峰

若夢

文枝

鞆ふむ足を平生まげかねて

なますにやせむ鮒二三十

葛城の小峰の雲が癖に成

みそぎちかづく里の麻刈

先だちて陸から戻る水主のもの

かなしきもちの盆にころがる

大風の跡の日向に居並て

帯の赤きは小鳥店が供

からころと餌に付鶴の立騒ぎ

之斤

関叟

僊芝

嵩平

梅價

儲史

履視

十壺

岱李

ゆふべに遠き山がみえ出す  
やぶれたる翠簾の内よりものいひて

霞あふぎに歌一首かく

むかしから舟の着場の月と花

種まく比の雀鮓うる

江戸みたる心に春を寂しがり

清閑寺石をひとつもて来る

新宅に蚊の声細き巳待して

夕がほ棚はけさのおもかげ

斗雪

花明

双南

可交

蝸州

乙道

白糸

百池

漢水

人のみぬ時は菓を打盈し

金馬

梅月夜扱も師走は昔なり

肥前長サキ祥禾

ひやつくや何が降ても初ざくら

、  
吾友

うめが香に杉や檜の(濁ママ)ずつかく

、  
怨交

万歳の座を譲りけり渡し守

、  
天外

二日より春の心に成にけり

、  
此溪

春風や鼻の先なる浅香山

在長サキ豊后花六

片道は月もうごかずうめの花

長崎  
虎睡

おそろしき名にして花の嵐山

水のぬるみに雲のむら立

春の夜の袖にも月や宿るらん

木を食ひちらす鳥のばらつき

青簾酒の仲間を撰出され

扇投込ふねの薄ぐれ

五位どのに琵琶打杯も雇れて

垣の外までたて塩をふる

、

鞍風

可交

風

交

風

交

、

風

松の陰瘦馬計繋ぎすて

あぶら煮返す鹿兒島の町

つく／＼と二度めの縁も氣にそまず

泣事多き秋のとり付

たき柴を月の片荷に引かたげ

庵の桜のはや紅葉する

なになりと書ねばならぬ筆持て

駕の出入も不自由勝なる

鳩のめにかゝるばかりの苔清水

蒼虬、交風交風交風交

ものおしみする神の立枯

千崖

谷ふかくおもふ所に雉子の声

此溪

ふぢ咲出す八專のそら

花六

夕霞連る旅に草臥て

、

みぎはに舟をよするさゝ波

溪

とにかくに月の庵のすみごゝろ

、

木々の錦の露ごとにそむ

六

尾永鳥秋の哀を鳴たがり

、

鐘つく度に年をかぞゆる

杉の木に湯立の笹を結付て

かぜもふかぬに動く松島

袖の香の移る封箱を押ひらき

雪の夕をさとの姫入

城跡によくもしらけし冬の月

鷺の羽おとに狐飛ぶ也

あら波の岩間に幕を引渡し

春のみつきをこぼす四辻

六、溪、六溪六、溪

やま寺もいと賑しき花の頃

雲雀の声の笠につかゆる

折ふしはうらみの瀧の聞ゆ也

硫黄の煙る人穴のうち

柚が身と生れし夢のおかしさよ

星ふたつみつ残る椽先

馬の背になみだの団扇くゝり付

小判なげうつ真野の青梅

義弘の塚に痘の願かけて

、 六 、 溪 、 六 、 溪 、

かすかにみゆる海のともし火  
歎けとて月のからうた書ちらし

和尚の帰る萩刈のあと

あさ毎に雀も鳩も渡り鳥

入江の沖にはゆるつり縄

南京の眼鑑に心わかやぎて

くすりすゝめるうれし野々尼

つく／＼と取広げたる瀬の皮

霞に交る昼中のあめ

溪、六、溪、六、溪

柵をうちこすばかり花いかだ  
老をことぶく棣棠の酒

六、

心せくや明ればくるゝ花の空  
戸をさした様子も花の庵哉  
角力取の花の寝言の哀也  
夜桜や静に時のうつり行  
春の夜の心に足ればなく蛙  
はるのよや裏に出れば垣一重

、島原

春喬

、花径

、麻丸

、よしひこ

、巴山

、霞林

初桜心にたらぬばかり也

おさなきは人の心よ梅の華

海苔壳におどろかさるゝ春日かな

とりつかぬ心ながらも初ざくら

梅が香の流れて水のぬるみけり

雪消てもとの野原や露の臺

鬚太の声の先より霞けり

花守の夢も花かやはなの中

帰雁紛るゝものもなかりけり

、平戸

、田代

、諫早

古涛

梅調

菊哉

桃人

淇桃

浦夕

夏亮

孤石

梅路

月花の夕べは狭き庵かな

、

文洲

蛙子や不二影映る水溜り

肥后八代

文暁

かげろふに水晶の珠数落しけり

、

竹壺

膝過る水を渡りて花の山

、

南梁

昨日けふ花の山とは成にけり

、

野梅

水澄て花の日と成にけり

、

鶴渚

梅が香に埋る草の庵哉

、

遊虎

どこへ行木偶売や春の曙

、

支硯

古き葉の一ふさゆかし花莖  
はるの雪梅の雫と消にけり  
花の下とりあつめたる五器の数  
桃活けて置ば形よし小徳利  
漣やあだにもならず花の屑  
をり馴る桜がもとの自然石  
常盤木の中より桜咲にけり  
炭売のかざすをみれば初桜  
かすみより霞に入か鳥の声

、 、 、 、 、 、 、 、 、

右竹 雪泉 三峰 杏水 萩里 一鳥 蘭子 素川 芦石

田の家をよくあらはして春の月

晩鐘をいくつも聞や山の花

暮る迄春風の吹塘かな

静けしといふ夜のものか雉子の声

朝／＼は草のもの也散桜

京の日を二日減すぞ春の雨

鶯の色の色なる朝日哉

山吹に二日の月のしづくかな

梟の声豊かなり別れ霜

、熊本

砂童

、潭月

、貫露

、仙斧

、車夫

、怨風

、羽人

、菊二

、梅溪

火を焚て梅折人か夜の舟  
山中に寺の田ありて鳴蛙  
ゆふ暮の鐘に広がる焼野哉  
有明の影もたのまぬさくらかな  
常盤木も朧になりぬ花の山  
ありあけの上に声有雲雀哉  
落て有花からみたりかど椿  
大寺の風は椿に消にけり  
さくらからつらりと出たる旭かな

、 、 、 、 、 、 、 、

鯉年  
雪枝  
和友  
曠輝  
朝四  
薰阿  
蘭戸  
斜葉  
如春

春の夜や心も付ぬ壁の穴

おぼろ月かたぶくものと思はれず

雁鴨の上にふはりと春の月

山吹の水や朝日の置どころ

分入れば我も曇るぞ花の山

うら町の犬を連て花見かな

雪解て鐘音よはる夜明哉

鶯の夜明にしだる桮かな

夜の明てゆるぎ出しけり山ざくら

、  
霞山

、  
蟻城

、  
久喜丸

、  
山鹿  
蝸入

、  
熊本千種庵秋郊

、  
霞觴

、  
李溪

、  
梧井

、  
素暁

都から歌の流れて春のかぜ  
散花の中よりおこる嵐かな  
山吹にばかり降しか宵の雨  
海棠やむかしのみゆる須磨明石  
大空に月はうもれて梨子の花  
かげろふの中打鍬の光かな  
鶉の声より暮るゝ椿かな  
うす雲の添て真昼の桜かな  
鶯や一すぢ匂ふ風の中

、佐敷  
、文献  
、三千丸  
、椿笠  
、月鶴  
、秀丸  
、法松  
、三笑  
、漱石  
、柳雨

青柳を鴉分行ゆふべかな

白波のこなたに月のさくら哉

、  
、  
眠石 汀雨

みて置けよ桜に閏二月なし

飯うまし花咲比の旅ごろも

細窓に月のはさまる花の宿

門叩く人もあれかし臙づき

蝶／＼やかかれてものを思はする

花の咲日は暮安き庵かな

大隅 其鹿  
、  
、  
日向 春波  
、  
、  
吟龍 長庵  
、  
、  
つる女 真彦

散花に鳥も来て鳴夕かな

筑前礒光

嵐二

満月をよくも朧になしにけり

、竹丸

泉左

さくら花思ひあまりてちらせたき

、直方

一萍

見てをれば近寄て来る桜かな

、

寄木

花の時我名も人のとひにけり

、

嵐梧

三日月の入際かゝる柳かな

、

桃雫

慾のなき顔並びけり花の陰

、

求古

ひらかんと桜の動く小枝哉

、

己青



鶏に言ひ聞せけり菊の苗

、小竹

柳左

昼過や雨の柳にしてほしき

、頓野

歌舌

初花に逢へとておろす草履哉

、宗方

五郎

新ら敷夜も出来たり梅の花

筑后

其成

ひとつかみ花の浮たる水田かな

、久留米

市暁

春の夜は雪の降さへよかりけり

、

寒岳

旅人に春風みゆる浦辺哉

、

草夢

門／＼の夜のみごろ也月と梅

、

芦月

風引て戻るや花に又一と夜  
親の日に三日後れて初桜

、  
、  
、  
沙明  
文角

山鳥の野を霞せて出たりけり

豊前畑村  
玄留

舌長に鶯鳴よ弥生やま

、中津  
其嵐

草鞋はく次手にも摘董かな

豊后日田  
葵亭

親子して山の端ほる春べ哉

、  
有篁

西山に用が出来たり花盛

、  
魚舌

門しめて寝ても居られず春の雪

、  
南美

花の陰本の遠山みつけたり  
隣にも一日居たる春日かな  
とる年を花に忘る二月かな

、  
、白杵  
、  
吐洲  
南溟  
双芙

大事とは花にひらめく天気哉  
卒忽にも暮ぬもの也春の山  
蝶の来てかしくしたりちいさい子  
ちる花の顔にかゝりて静なり  
夕風や人の跡にて散さくら

丹波大山  
武陵  
杜高  
起春  
東眉  
白路

かげろふの草に飛つく雀かな

梅に鳥鳴かせてみたき夜也けり

明かゝる桜に松の雫かな

花咲や夢の戻の覚心

よくみれば葉に毛のはえしねばつゝじ

菜の花や川幅ほどの水がゆく

春の風家一ぱいにあまりけり

捨ばやと思ふに憎し白薊

雫迄処さだめぬ柳かな

、  
梧朗

、  
笹山  
台秋

、  
梅迫  
里雀

、  
梅笑

、  
上林  
荃来

、  
淇竹

、  
白駒

、  
梶原  
秋栞

、  
六合

嘶して茶を摘老の二人かな

、  
青而

何ぞ障るやうに散けり夕桜

丹後宮津万籟

西山や雲さめて亦夕ざくら

、  
馬良

ゆふげしき借か桜のひとつ家

、  
柳絮

持こたえ／＼夜のさくら哉

、  
魚道

谷深し桜の花の散て行

、  
鳳吹

夜桜と成てももの食ふ庵哉

、  
梅士

鶯の滝向てなく日よりかな

、  
百由

日あたりや吹にして置春の風  
あながちに麦にも寄らず春の雁  
月代や我影に散山ざくら  
花の夜も短く成るや蚤一つ  
まだ傘の放されぬ野や初桜  
春雨の降にまだ鳴暮の鐘  
山の井や覗てみても花曇  
夜桜のひと際高しかみの丁  
しら波の軽う打也ゆふざくら

、 、 、 、 、 、 、 、

潮花 且志 月亀 鱗也 孤丸 双梧 魯淳 巍道 成坡

動かざる時は霞める柳かな  
ねもころに垣根の蝶の二月哉

、加悦  
、田辺

井霞  
孔昭

春の雪昼降ものと成にけり

海苔とる磯へまがり行水

万籟

蒼虬

菝の香に家のあはひの土肥て

はしらの釘を二人してぬく

馬良

葛袴一夏たてる月影に

橡の木廓いつもすゞしき

籟

良

行基壺文字のみゆるは珍敷

あみしほからでひるを出さるゝ

大粒な雨を家鴨の追ありき

鳥羽の車のいち時に来る

青筵ことしは買ぬつもりにて

母の目覚に夕日かたぶく

砂除の松もそだちて波の音

門ンの仏は千年のつゆ

奉公の淋しき身にも月はてり

良 虬 籟 良 虬 籟 良 虬 籟

夜を寝ぬとなら雁も我友

霧の奥花やあらんと立田越

くぼき所は桔梗刈萱

馬計繋ぎて人は居らぬ也

御なき声の細き夜嵐

あら菰の上の祈も七日たち

干鯛の箱をこぢ明にけり

うつすりと氷室の桜香も有て

啼／＼鶴の消る蒼空

良 虬 籟 良 虬 籟 良 虬 籟

仮そめも裸身で居る舟のもの

十露盤あげる神棚の隅

栗酒の蒸吹さます秋風に

顔が揃ふて月もいざよふ

きぬたうつ田中の家を見せにやり

まだあちこちに引残る水

神宮寺の和尚が歩行て通らるゝ

日の出ぬまえと植木あつかふ

御物見の上は取わけ花盛

良 虬 籟 良 虬 籟 良 虬 籟

鳥の摺餌も陽炎にけり

籟

谷の雪残るうはさに弓提て

虬

はつ雷に青むなはしろ

良

枝折戸や闇の柳の障る音

、大島 春潮

【注】糸井本に「潮」の横に「湖」と墨字の書込み有り。

笹の風頓て柳にうつりけり

、 白嘯

ゆく人に馴合やすき柳哉

、 可友

降れ／＼とおもふ日も有春の雪

、河守 無諍

霞む日や畳の上の捨づゝみ

、 弥芳

咲満る桜に夜のはし居哉

但馬上野鳥行

一日人／＼と水谷の花見に罷て

水谷や瀧も不動も花の底

、大養父鳳兮

夕がすみつかえる山もなかりけり

、出石 弄月

草鞋はく朝を寒の別れ哉

、南花

鶯の鳴てもさびし杉の雨

、雲居

迎も行日をかたどりて野々柳

、月阿

朝露を下にみて鳴雲雀哉

、乙叢

雉子の声桜一木を見出しけり

、旨梶

落付た顔でみて居る椿かな

人先に出て人先に梅の花

田の中やいとま乞して帰雁

夕暮や人落ついて春の月

明六つに今朝はおくれて雉子の声

夜の橋蛙のうへを渡りけり

きのふけふ余寒放れて草の雨

御衣がほして有也きじの声

山の井や汲人あれば雉子の声

、

、

、

、

、

、

、

、

、

司 蚓

魚 彦

一 簣

唇 涯

鸞 厓

榲 松

朱 鶴

猿 甫

圃 夫

散花に顔ふり向る鴉かな  
 鶯や日和鳴出す山かつら  
 春の水塵も交らず流けり  
 遊ぶ蝶花の上にも居つかぬか  
 春雨や寝ても居られず朝雀  
 したしさの心あまれり雨の花  
 雉子鳴て春の届かぬ山もなし  
 長閑さや朝／＼煙る禁寺  
 鶯や御松に近き朝朗

、日和坂 一貫  
 、浜坂 勒居  
 、 四暢  
 、 藍尾  
 、 尚古  
 、 芝 龍堆  
 、 潤甫  
 、 東圃  
 、 七釜 弓月

梅が香に埋れて夜は明にけり

山吹や傘の雫の落る所

款冬の静にみゆる小家哉

鶯の枝に障るな松葉搔

脈取て見るや花の夜只独

草の蛙の雨を呼ぶ声

舟木曳跡の霞を掃けして

祖父が帰を待ばかり也

、  
桃卜

、  
章甫

、  
二方  
月波

、  
手辺  
竺仙

蒼虬

村之

千崖

、

配膳にはや落かゝる朝の月

秋のしほりのみゆる漂杭

一文で下駄かる道も萩散て

心尊き宵のこつじき

神楽めせ／＼とて舟は行

しぐれの底のぬける淋しさ

思ふ事何もなき野々門構

兀てつれなき君がさし鞆

仇に汲月の清水も花の薬

之 之 之 之 之 之 之 之

蜷みかけて升借に遣る

火串売戸口に夏の近寄て

九戸と高野の間がけはしき

筆まめな心時／＼羨れ

嗽するにも塩はやき空

之 崖 之 崖 之

まだ寒き奈良の月夜を初桜

さぶいのも合点で出れば春の月

人について門迄来たり夕霞

因州鳥取村之

不説

梅村

片扉あけて先みる桜かな

紫太に覗かれにけりさくら狩

寝心の桜に近き月夜哉

松杉の静な外を春の月

河添の木さへみゆれば柳かな

ひとつひくあしたと成て雨の雁

藪入やその草の戸の梅もみず

かはほりとみる迄野辺を飛燕

出直せば又西須磨の春の風

、  
越山

、  
竹磨

、  
兌籟

、  
李謙

、  
六居

、  
三籟

、  
車用

、  
如駭

、  
卵鳴

春の雨気色にまけて止みにけり	、	至三
鶯の春をふくらす咽かな	、	大壺
如月の雁さへみれば日和かな	、	雷師
仰でもふしても旅ぞ春の雨	、僧	為一
かなしみもおこる桜の盛かな	、	飛文
散花をおもひ捨れば遅桜	、	大蕪
草の戸や五尺放れて鳴雲雀	、鹿野	馬陵
人のよる方を柳の青みけり	、若桜	及志
出代や京を離るゝ薄月夜	、女	至白

永き日の昼から出たり松の風

、 浅掲

藪木にはして置ぬ也梅の花

伯州三サキ湖水

明がたの月の初花匂ひけり

、女 李葉

鶯の急にはをりぬ畑かな

千崖

露に寒さの残る松苗

湖水

鋳物師が霞の中にももの食ふて

、

瀧くみあげる朝の骨折

崖

築捨ていつの俣なる月見台

兔の道をふさぐ穂すゝき

百たまる阿舎梨の錢に秋暮て

いこまの雲に人声のする

あて扶持に病ぬ鳥迄のこ／＼と

雪ふみよごす供のさむらい

神楽めす跡の哀に灯をともし

薬の下をちよろ／＼と焚

こもにまく聳が忍草もほどかせて

、 水 崖 水 崖 水 崖 水 崖

花にとめ置城崎の馬

月もよし夜よし蜩のとれて来る

草履の裏も雨かたきさま

拾ひ木のひとり崩るゝ軒の下

堀の蚯蚓の夏しらぬ声

崖 水 崖 水 崖

焼のぼる山に雨添ふ夜明哉

山寺の芽独活堀出す雉子かな

雨にして寝らるゝ春の夕かな

、大谷

徽州

、境

禹水

、川先

一瓢

雁鳴て桜も散と思ひけり

さすかたもなくうかれ出つゝ

、  
沾浪

野暮山くれ里暮て

蝶／＼の我世はかろき旅寝哉

出雲大社 浦安

雁鴨のつとめて鳴か春の雨

、母里 冬曠

山吹やうか／＼行ば水の中

石州池田 秋里

鶯やどちら向てもまつの中

周防白松 和道

古畑の小松ふとりぬきじの声

、小郡 不占

梅咲や明際のたつかた在所  
昼過や海苔の香を吹春の風  
鳥も来て身を繕ふや梅の花  
散花やみな月影の添て行  
さればこそ山吹みゆる奥の家  
鶯や門は日頃の茶木畑  
我庵や花の咲日は人も来ず  
初午や夜の酒もり雪のつむ

、 一葉  
、 秋月  
、 和木  
下開 羅風  
上関 事白  
下関 冬蘿  
、 花休

安芸広島篤老

田螺の籠の寒きしたより  
糸くばる人の袂に春みえて

さつくりと吹月前の風

関の戸を礎の音のこゆるやら

舟をかぞへて日をくらす露

むせるほど土鍋の下のくすぼりて

ついでう事も哀れさう也

塚射る君が姿をさしのぞき

子猫もらふて戻る番町

双 玉 路  
虻 桐 宅  
老 宅 老 虻

茨さく雨のあかりのいらつきて

利休の像を二度きざみけり

薄月の二階に蒔しきならべ

いぶきの嵐むかふ齒にしむ

豆鳥がわたりしまへば荷をからみ

十日の汐の橋にこたへる

一さとのやくかいにする花畠

羽織着つれて五加木つみけり

瘡馬の太鼓がなれば春は行

綾彦 虻 老 桐 宅 老 虻 宅 桐

土蔵の間にみえる夕虹

草翠

かせ糸のやうに乱るゝあだごゝろ

がざみをせゝる箸のあさまし

けふはまた播磨の沖に浪の立

八手の花に庭風呂をたく

黄昏の杭に来てゐるみそさゝゐ

ほろり／＼と落る山つち

子細なく七日の護摩もはてるらん

咽が干るとて梨をくひけり

宅老虻 宅老虻 彦翠 宅老虻

町尻の角力場かまへるくれの月

風にくはらりと秋の広がる

鶏の砂ふりこぼす蘆の上

かりそめながら三月わづらふ

はたち迄しらずにをりし姪の顔

咳をおさへて次の間へ立

初花を車／＼に呼立て

こゝぞとかすむ湖の朝

彦 翠 虻 老 宅 彦 翠 筆

わかな摘人とみえけり後ろつき  
さかさまに土橋のうらの堇かな

春雨や餅つく家も山の陰

よはさうな花はみえぬや赤椿

大やうな山のはなれや朧月

鶯にかゝへまはるや料理物

しづかなる空や雪解の松の露

せはしなや一日正月二日灸

精出して降ともみえず春の雪

月章

嵐夕

十六

路宅

和尤

梧来

準虻

夏雲

魚年

苗しろや都出れば青くさき  
 菜の花にほころびにけり恋衣  
 只ひとり起て月夜の柳かな  
 桜咲木かげ／＼や帆かけ舟  
 凧切て日和すはるやひとつ松  
 春の野や三十年のものがたり  
 梅をみて直ぐにもどりし径哉  
 鶯のうぐひす聞て居にけり  
 鉢植の花に壺中の春暮ぬ

、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 、  
 忠海  
 、三盃

米億  
 圭雨  
 柳後  
 速雄  
 梅理  
 甘古  
 宇柏  
 馬卵  
 淇園

鶴鳴や余寒のみゆる馬の上  
旅のめし食ならひけり梅花  
手はしかく霞行也猪牙二艘  
おもふ事ひとつふえたり初桜  
散桜みなも散さぬ嵐かな  
しづかさや夕山陰の遅桜  
四五軒の朝影長し藪つばき  
鳥はみな親子になるよ遅桜  
吉野山花より奥はなかりけり

備后フク山午后  
備中倉敷 五蓬  
備後福山 李朝  
、三原 芝暁  
、田房 桃甫  
備香登 孤松  
伊与今治 其梅  
、 国丸  
、 蝸州

寝ぶたさの眼先にあるよ春の月

讚岐姫浜

桃里

鶴のやどる梢をみたり春の雨

、  
霜操

念頃に毎夜さ来たりはるの猫

、仁尾  
宗値

花守の兔追出す月夜かな

、  
万頃

はなに風めで度過たる夕かな

、丸亀  
古彦

心よや花盗人に酒くれて

、  
雄鹿

しづかさの余て花の散日かな

、  
梅堂

鐘つけば日の暮る也藤の華

淡路

青城

春の夜のそれなりみゆれ朝朗

、

花橋

牧馬の見に出て居るや春の海

、

南岡

よし野にて

花ざかり杉の月夜はなかりけり

、

烏秋

翌の事おもはぬ花の盛かな

播磨北条

梅廬

見尽さぬ花に倦るゝ雨夜哉

、鹿間

田実

山城の夜はまだ寒し朧月

兵庫

松月

五器で汲流も梅の匂ひかな

、

芝蘭

むかし我背くらべしたる桜かな

春風や花咲里の初日より

土蔵たてゝ趣かはる桜かな

遅桜咲おくれしを手柄也

あふみ路に宿も定めず雁の行

散花の梢は侘し鴉の海

山明の咲やすげ也花曇

散桜月かたらひて面白き

浪華

米彦

扇暑

春思

春来

鶯雪

丹頂

蛾月

豊郷



花の雨花よりはれて色深し  
木啄の外に音なき桜かな  
此比は夜心しらぬさくら哉  
蒼空のけふこそ花の浮世哉  
初ざくら咲と申よ雲に鳥  
処／＼残るさくらの月夜哉  
足もとに汐のさし来る桜哉  
うき雲に顔合したる桜かな  
花咲て壁取置の山家かな

、  
、  
、  
、  
、  
、  
、  
、  
山田

志完  
椿堂  
左涯  
鷺洲  
省我  
桃林  
其白  
春湖  
暁浦

半暮る日のなつかしや遅桜  
 筋違に道も付ひたり花曇  
 烏帽子着て庭掃上や八重桜  
 山賤も手をかざしたる桜かな  
 やま吹のたれるを庵の表かな  
 詠つめて穴のあいたる桜かな  
 明星やさくらにうつる摺火打  
 春の水日／＼に太る気色哉

尾張	伊賀上ノ	、山田	、四日市	、	、津	、龜山	、白子
菊史	笛人	淇石	眠五	支吟	梅楼	其阜	斗口

梅の花笠寺は雨の朝日哉  
花守となれり時雨の落葉搔  
初霞鳴戸の若和布売にくる  
春雨や人のきげんを問ひにける  
ぬかぼしの消て藪から雁が行  
春風やものゝ種売藪の家  
高／＼と鳶は舞けり山ざくら  
百姓の夜中歩行や桃の花  
蝶に蝶のとまろうとする姿哉

、 、 、 、 、 、 、 、

東閣 徐英 而后 墨樵 月底 木天 佳樵 国雄 一古

朧さや月夜は西のやまのうへ  
、清飲 鶴人

【注】石川歴博本、地名「清須」。糸井本、朱筆で「飲」を消し「須」を  
書入れ訂正。

朝まだき覚束なくも桜かな  
三河新城 翫之

珍しき人にも逢り花の山  
、 一声

春風や山寺の鐘あとを引  
、 榎園

花もどり人大勢に成にけり  
、 蟻道

老の世となれば引けり鶴の声  
、吉田 茶筵

世の中はいつも桜の散いそぎ  
遠州植松 和吹

散桜硯の海の干潟かな  
、上庄内 松山

きのふから催し雨よ帰雁

美ノセキ巴圭

春の夜のものにはしたり風の芦

蒼虬

小田のかはづの声を尋る

有斐

手とり鍋みがゝぬなりの如月に

ねぶたき時の隣もちけり

十六夜は古き詠に立もどり

舟を繫ばすさまじき露

はつと火の燃るばかりの宮迂し

虬 斐 、 虬 、

僧都の母の挨拶を聞く

ゆふ空にしばし脚氣の膝立て

魚の骨やくころ／＼の里

枯しのぶ一葉折らぬも心なき

寒さをにくむ恋の中だち

雑式が顔を月夜にさし覗き

鳴子のおとをとめに遣りけり

御祓すと聞けば桂も秋のすゑ

余所の門まで祖父の掃るゝ

虬 斐 虬 、 斐 虬 斐 虬 斐

花の事言はぬ先より花咲て

ながれのはたに霞む山鳥

虬 斐

椿ほどつめたき花はなかりけり

信州田中

希杖

心あてに鶴をみておけ朧月

、

其翠

人なれし鳥の多さよさくら狩

、林

風子

花の日や暮て田にしの売をしみ

甲斐

有斐

裂箸の香に更安し春の月

、

真恒

散花のあるじぶり也門の不二

、

重行



万歳の烏帽子かたぐも祝哉  
鶯のいろ／＼に鳴山家かな  
折くれし花のあと也夕嵐  
山鳥の来るやいつまで春寒み  
野良風の吹広げたり露の臺  
花のかたむけて建たる小家哉  
連翹の垣や照る影曇る影  
いにしへの友に逢けり花の庵  
山寺やけぶりかすりて朝桜

常陸

松江

、よし香

、上毛新波 此教

、大原 茅磨

、ヤナセ 朴哉

、松井田 李翠

、磯部 扇立

、喜全

、一風

花はみな朧也けりやま桜

小雨降中に桜や人の声

明の月花にしらみて仕舞けり

出る帆のさはぎに浦のすそは行

ひや／＼と夜の明て有柳哉

星影にほの見る梅の寂しけれ

跡ざりにみるや夕日の山桜

延付に長閑けき里の昼飯哉

、

、

、

、惣社

下総結城

奥州伊達

、安達

、二本松

口々

長賀

鬼丸

士虬

眼齋

徐水

露遊

乙調

散心なくて桜の夜明かな

町中へ月もて来たり梅の花

鶯に打まかせけり我こゝろ

江の面や鐘に押るゝ朝霞

青柳にとゞかで月の二日かな

ゆふ暮やしばしこらゆる梅花

早蕨や是まで届く昼の鐘

夜の雛ものや言たき姿也

鶯の鳴や朝から不二の山

、会津

、ツガル

如髪

里川

五友

呑馬

粗長

ト古

白珂

祇山

布席

、青森

、宮館

晦日のぐるりあかるし山の花

麦のみどりは雁の賤別

春の雨普は甕に水汲て

切火にまじる塩のはら／＼

笹の葉を幣と言も安き世や

浦輪の人の眉も正直

月に露恋に泪はならひ也

なさけくらべの黄菊白菊

曉花

雨桂

万休

文華

長昌

露橘

指月

執筆

夢をみて花をみる日は少いぞ  
おもしろしあら面白し花と水  
花に住蜂人を追ふことなかれ  
笑ふて過る春の跡先

日は廿日月は朧の中くぼに  
ふり返りみよ旅のきぬ／＼  
うき身とはぬれ手拭の藍の色

出羽宮内

雨桂  
万休

曉花

湖翠

仙耳

美津留

圭齋

誰が罪白眼鐘の龍頭は

血を吐し鳥の隠るゝ木下闇

机のうへに五月雨のそら

散花の夜は水くさく明にけり

鳴鐘の隅に花もつ辛夷哉

傘さいて見るさへ嬉し春の雨

梅見舞と泣子か月の門あたり

、大塚

、最上

越后柏崎

、

眠笑

扇柳

周和

湖翠

亀年

平水

双眉

草の戸の貧しくもなし月と梅

、四ツ谷

秋峰

鳴鳥の口より霞む山辺哉

、高田

都遊

鶯よ一足行ば小松やま

、

芙蓉

寢心やかならず帰雁の声

、

梅路

老となる約束はなし春の雨

、

左琴

かげろふの跡拾ひ行ひよこ哉

、与板

悟明

菜の花や果なし雲の行着ぬ

、山谷

のぼる

飯煙の霞と成て暮にけり

、出雲サキ

恭峨

春寒し小昼の鳶の枝に鳴

、荒井

旭浪

みよし野や三十日も花の薄明り

、大決

雨岑

陽炎や畔新らしき田一枚

、岡野丁

梅泉

春もまたみやれば寒し野の黒み

、

霞暁

野鳥の流石に鳴ぬ春べ哉

、

董水

裙もちの摘たそうなる若な哉

、山室村

秀山

釈迦堂に人の声有散桜

、妻有

二川

人ちかくなりて行かや春の雁

越中石動

史唵

行雁にうしろゆびさすかゝし哉

、戸出

玉可

霞から梢がみゆる嵐山

暮行や参あやしくぬる胡蝶

雪解や在処心の離れたり

夜の明る浜見て帰る二月哉

来るとはや人馴顔の乙鳥かな

いつとても丸い心よおぼろ月

静さは花のうねりの山路哉

湖水うつ波音もなし葦草

、高岡 内海

越中魚津 孤山

、 其竟

、 徐生

、 周台

、 大翼

、能生 起石

、 五禽

花守や何夢結ぶ雨のあさ

桂児

啼蛙炉の火もとぼし此ゆふべ

、富山 如柏

畑中の桃に一日日のあたる

、 烏林

なま酔を泣する梅の匂ひ哉

、 蘭陵

花に来る人をもてなす清水かな

、 宇井

あさ／＼と見るは桜の梢なれ

、 六列

よし野にて

杉絵花の眼休め足やすめ

、 椿齋

人も馬も吹れに出たり春の風

、放生津 草風

梅に人多し柳に人えらび  
うめさけば椿もらひに人の来る  
朧とは桜に伊達の名なるべし  
梅提し人を渡のはじめかな  
人の来るやうに吹たる柳かな  
花の月影たすものは雪のうへ  
こよみにも書て有かや猫の恋  
蛙子に火を打かけて種風  
虹が根を烏ふんばる春の雨

加賀  
巴石  
、  
年緒  
、  
兔文  
、  
一抄  
、  
棹江  
越水橋  
文器  
かゞ  
商齋  
、鶴木  
歌滝  
桃林

くゝたちや京へとならば雪付て

松風の夜も等閑に春の行

のどけさや屋根迄鴉のありく音

暁の心に寒しあめの華

散花に肌こそばゆき木陰哉

鶯の椽に掃出す埃かな

丁の道作り初たり夕がすみ

春の夜や海遠ざかる松の隙

呂竹

、高松 自明

能登輪ジマ 軽黄

、 差庭

、 蝶睡

、鵜川 之楓

、石動山 簡路

佐渡 文雄

何しても暮せるものよ野老堀

江州八マン芳之

太秦はどちら向ても花の道

、 柏翠

家ひとつあればめぐりて春の水

、 可盈

田螺食ふほどは小寒し宵の雨

、 春雄

眼にもものゝ付たやう也春の空

、 笳音

歩行さへすれば吹也春のかぜ

、 夜外

蝶／＼の白きにつけて友の来る

、 班車

咲花に何も売らぬよ丘の家

、 芦洲

門の有家は古びてなくかはづ

、 仙李

雉子啼て松の深みを覚けり  
初花や海と山との里の中  
花戻りちいさき月の桜かな  
青柳や水汲声の二三  
嘴太のあくほど桃は咲にけり  
それも松是もまつとて蝶の飛  
降雨にぬれる声也畑の雉子  
山吹やあたまの上に鳴鳥  
蛙なく夜の境や油筒

、  
、日野  
、  
、長浜  
、和尔  
、三井寺  
、音羽  
、太田  
、カモ  
巫山  
松蘿  
雨洲  
素岳  
吞龍  
千影  
田美  
乙鶴  
稻渕

もの忘するや朝から花盛

、堅田

馬当

手にあまるほど美しき董かな

、花丈

田の水の花にしたしき月夜哉

、峨石

桃赤う咲や何とか啼からず

、文常

神祈る哀も花の慾なるか

、三谷  
来車

【注】石川歴博、中七「命も花の」

夜桜や花には何の露が降

、栃木  
北馬

はつせにて

廻廊をくぐるさくらの夜は深し

、鷺泊

爺婆々の夕飯過ぬあか椿

、田井  
重塊

みる所のおほなる春の行急かな

、素耕

春風やほそい木迄が花に成  
つく／＼と人みる花のやま鳥  
とく起て待てば鶯遅かりし  
夜ざくらに欠び移して歩行けり  
もの申遠近人よ花供養  
祇王寺へ酢売もきたり山桜  
あけぬ間を鳥のちらつく桜哉  
散花のぬれ色うつるはしらかな  
谷間は桃みる迄の節句かな

、野田 竈山  
、水口 蜷州  
、 淇園  
、走井 烏頂  
、 嵩平  
、大津 石鹿  
、坂本 花陶  
山城八幡 奇文  
、 何有

散花に嵐おこるや波がしら

洛

百池

入相に桜ちるあの泊瀬寺

一熊

暮るにも心付ぬやさくら狩

花頂僧

巴水

世の春を内に居る日の花曇

履視

言はやす晦日ぞはや梅の花

芙九

折／＼て花は霞の山桜

芹水

立寄れば花にむかしの移りけり

能守

よきほどにこぼれて置けよ花の雨

馬龍

笹原や雁に別れて小提灯

茂良

あさい笠ばかり並て花の雲

三千竹

皆こちら向にみゆるぞ花の山

在京丹后

月叟

木の葉にも鶴は寝る也花曇

百丸

白梅の遠くも散ず静なり

其白

笹に聞雨は花待たよりかな

漢水

汐先へはやまはりけり春の雁

岱李

鴛もいぬる余寒のゆるみ哉

あたふ

野に出れば夕影のかつ柳かな

万栖

散花にのちといふ声はなかりけり

蓬生といひ初にけり春の月

はれやかに花は咲たり須磨の浦

炭やきが黒き顔より霞けり

静さや花のうへ吹あらし山

立されど花に心の残りけり

日の暮て盛のみゆる桜かな

山の端に日は有ながら春の月

山ざとのゆすりが花に捲簾

在京豊后

女

双南

十壺

千代道

巴水

白糸

芦涯

月峰

布雪

茂椎

散花の相手に行か小商人

中／＼にちるとはみえず夜の花

草臥て嬉し桜のあくる朝

花の雨比叡みかえらぬ人もなし

人音や花の跡なる石拾ひ

素頑

千崖

梅價

雪雄

蒼虬

花供養集跋

今の世の俳人たゞいき過をよろこびて、向上の一路にあそぶはさることなれども、師伝の沙汰なく質朴をうしなふかたもまゝありぬべし。されば、

中ごろの人の蕉門三世、四世などかけるをみて

は、たゞに野俗なることのやうにおもへど、師伝法脈といふことかならずなくて、かなはぬものなりと

かや。発句、付合いかにも上手にいひまはし、宗匠顔する人たちも、師伝のみだれたるは、こゝろえたがひの

すぢおほかる。扱々や、今の芭蕉堂のあるじ、なら  
びにおのれが輩の師とたのみし闌更翁は、蕉門の  
高弟北枝叟の門人希因先生に学び給ひて、  
出藍のきこえありけるが、ふかく此ことをなげき  
たまひて、常に師伝の事をしめし給へり。まことに  
此一宗旨につらならん人は、芭蕉堂を本山  
として、年／＼の花供養おこたることなかれ  
かし、と初心の人々にすゝめ侍る。

文化九年壬申

蕉門五世 篤老謹書

芭蕉堂書林 烏丸下立売上ル町 勝田善助

(裏表紙見返し)

（裏表紙）